

プラネタリウム使い震災語り継ぐ 芦屋の児童館



プラネタリウムに映し出された
21年前の夜空を眺める親子ら
＝芦屋市浜風町（撮影・三津山朋彦）

拡大

震災遺児のケアハウスとして設立された兵庫県芦屋市の児童館「浜風の家」（同市浜風町）で17日、仮設のプラネタリウムに震災発生当日の星空や写真を投影し、当時の様子を語り継ぐイベントがあった。

同施設は作家の故藤本義一さんの呼び掛けで1999年に開設。社会福祉法人「のぞみ会」が運営し、遺児の利用がなくなってからは児童館として利用されている。

館内に円形に膨らむテントを張り、プラネタリウムを特設。まずこの日の日没から午後7時すぎまでの夜空が映し出された。その後、95年1月17日の星空に“タイムスリップ”。震災で倒壊した家屋や高速道路などの写真も投影され、街が崩壊

した様子や水くみの苦労などを同施設長の寅巴里（トラバリー）ハッサンさん（50）が説明した。

寅巴里さんは「プラネタリウムなど子どもたちが興味を持つものをきっかけに、備えが必要なことや震災の記憶を伝えていきたい」と話した。（篠原拓真）